

観音菩薩の宗教

⑤

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

称名と救い

宗教にはさまざまな役割や目的があるが、なかでも衆生の救済は最も重要である。人の心や社会には困難や苦悩がつきもので、その解決のためこれまで宗教は少なからぬ役割を果たしてきた。

人の悩みを克服するため、仏教では大別してふたつの思想が展開した。ひとつは自分自身の心の持ちよう、心身の修練によって辛い思いを乗り越えることで、ブツダが随所で説いたことである。自分の力によって自分を救うということから、こうした思想を「自力」ともいう。もうひとつは仏菩薩や神々に身をゆだねて救いを求める信仰で、ことに大乘仏教の時代に盛んになった。阿弥

陀仏に一切の救いを祈願する浄土思想などはその典型で、これを自力に対して「他力」という。観音菩薩が多面で広範な尊崇を得たのは、ひとえにその救済の力による。その力は易行、すなわち誰にも可能で簡単な方法で発揮される。易行は難行の反対である。具体的には、衆生が観音菩薩に救いを求める声を発するだけで救われることを指す。こうした衆生の声に応え、観音菩薩はあらゆる姿となってあらゆる場所に出現し、あらゆる苦難から救って下さるとされた。観音信仰が時代と地域を超えて弘まってきたのは、こうした易行性による。「観音経」によれば、観音菩薩の名前を

称える「称名」、または観音菩薩を心に念ずるだけで、「七難三毒難」のようなあらゆる苦難から救われるという。その際、観音菩薩は三十三観音に代表される権化と呼ばれる多様な姿に身を変じて衆生の前に出現すると信ぜられた。七難三毒難と権化のふたつは追って述べることにし、ここでは観音菩薩の称名と念仏について考察してみたい。

前回見たように、「観音経」は鳩摩羅什訳『法華経』の第二十五章「普門品」に相当する。「普門」とはサンスクリット語で「サマンタ・ムカ」といい、どこにも誰にも門戸が開かれていることを表す。つまり、観音菩薩は普く門を開いてすべての衆生を受け入れるという意味である。口や心で観音菩薩の称名をすれば、その門戸は一切衆生に開かれる。このことを「普門品」は次のように説く。「もし百万億もの衆生がさまざまな苦悩



モンゴル国バヤンホンゴル県の寺院に置かれた香炉。その表面にネパール系のランツァ文字で六字真言が書かれている

を受けていたとしても、この観世音菩薩のことを耳にして、「一心にその名を称えれば、観世音菩薩はすぐさまそうした声を観て、それによって衆生はみな解脱することができ(若有無量百万億衆生、受諸苦惱、聞是観世音菩薩、一心称名、観世音菩薩、即時觀其音声、皆得解脱)」。ここで大切なのは「一心に名を称える」ことである。「一心」とは「観音経」の言葉借りれば「念念勿生疑」、すなわ

ち「観音菩薩に対して決して疑いを生じてはならぬ」ということを指す。仏教学者の後藤大用によれば「一心」とは自分を捨て去って観音菩薩に帰命することであり、衆生自らが観音菩薩と一体化することとされる(「観音菩薩の研究」山喜房仏書林)。「観音経」において同様の文句は繰り返して述べられ、「彼の観音菩薩の力を念ずれば」を意味する「念彼観音力」は十三回も現れて、苦難から救われると説か

れている。念ずるとき、称名するときには「一心に行わなければならない」とするの「観音経」の教えである。

こうした観音菩薩の力により救われた歴史的人物に、唐の玄奘三蔵がいる。玄奘三蔵は、仏典を求めて沙漠を越えてインドに渡った高僧である。後世、明代に伝説化された伝奇小説の『西遊記』における三蔵法師として人気を博したが、歴史上の玄奘には孫悟空などの強力なお供はおらず、「子然として沙漠を孤遊」と自ら述べている(『大唐西域記』。「子然」は「たったひとり」で、「孤遊」も「ひとりで行く」の謂である。こうした孤独の沙漠の中で、玄奘は革袋に入れた飲料水を手から滑らして落としてしまい、「千里の行資、一朝にしてここに罄し(これからさき、千里に渡って必要な旅行道具の水が一瞬にしてなくなった)」という危機に直面した。さ

らに、夜は妖魘(化け物)、屋は砂嵐に襲われながらも、一滴の喉をうるおす水もなく五日に亘って沙漠を進んで行った。口も腹も乾いてほとんど気絶する寸前となったが、ひたすら「般若心経」と、その教主である観自在菩薩を心に念じ、「私は財も名誉も求めず、ひたすら仏法のためにやって来たのです」と告げると心が安らいだ。五日目の夜半に眠りにつき、巨大な神の夢とともに目覚めると泉を見つけて一命をとりとめたという(『大慈恩寺三蔵法師伝』)。神とは観音菩薩の権化と捉えてよからう。

このエピソードからあらためて観音菩薩の救いを考えると、玄奘は迷いや恐怖のみならず、慈悲深き観音菩薩すらも心の現れと捉えていたことがわかる。浄土教では「唯心の弥陀」とか「己心の弥陀」とい、阿彌陀仏も心の現れと説かれるが、観音菩薩も同様である。

困難な状況にあっても「二心」に観音菩薩を念じ称名するならば、恐怖などの余計な思いが心に入り込む余地は失せる。一心称名、念彼観音力の実践により、玄奘は沙漠から脱出できた。すなわち称名と念仏による困難の打開である。玄奘のエピソードには観音信仰の本質が凝縮されていると見ることができるとも

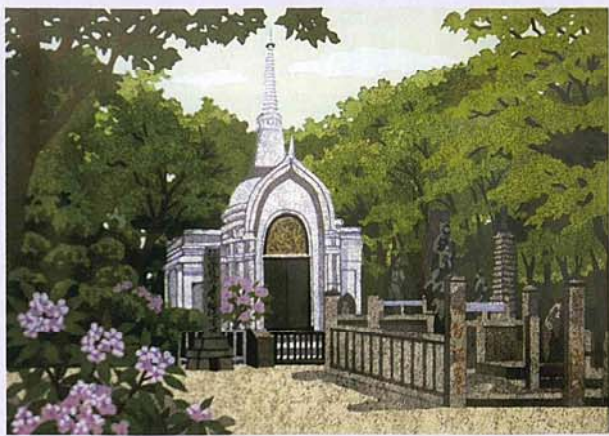
『観音経』は主に漢文仏教圏で隆盛を極めたが、インド仏教圏では『カーランダ・ヴェーハ・マハーヤーナ・ストトラ・ラージャヤ(大乘莊嚴宝王経)』という観音菩薩の功德を説く経典が大きな影響を残した(佐久間留理子「インド密教の観自在研究」山喜房仏書林)。この経典は、多くの物語・説話を通じ、どんな苦難にあつても観音菩薩を讃える六音節の「オーム・マニ・パドメー・フーム」という真言を唱えれば救われると説いている。こ

の真言はインドの文字やチベット文字で書くこと六字になることから「六字真言」と呼ばれ、インド・チベット・モンゴル・ネパール・カンボジアなどでは知らぬ人がいないほど普及し、現在なお老若

男女が寺院や家庭で唱えている。紙幅の都合で余は別稿に譲るが、「六字真言」も「観音経」の称名と同じく、その易行性と汎用性により絶大な観音信仰を支える根拠となつて来た。

院内散歩 16

薬王院の展示物



木版画『風薫る初夏の有喜苑』作・井堂雅夫